

文献紹介

Colonel R. B. Oram ; Cargo Handling and the Modern Port

松木俊武

(日本埠頭倉庫・株)

著者コロネル・オーラム氏は、長くロンドン港のポートオーソリティに在って、港湾管理の実務にたづさわった後、Technical Secretary をつとめ、現在は International Cargo Handling Co-ordination と Maritime Expert to Bureau of Technical Assistance のコンサルタントとして活躍する一方、ロンドン港ポートオーソリティに附属する Shipping Training Center の講師をも兼ねる当代イギリスにおける港湾問題のエキスパートである。

本書はその題名が示すごとく、あるいは著者の経験が語るごとく、港を通過する貨物に関する話題を中心とし、港湾の設備、労働問題、管理機構、輸送手段、荷役方法等について種々な角度から述べたものである。内容がかくの如く多岐にわたっているために、深く突込んだ議論やとりたてて新しい問題の提起は成されていないが、豊富な実例と多くの興味ある数字によって、現代の港湾が直面している複雑な問題の数々が、手際よく簡潔に書かれており、港湾問題の基本的な理解を深めるには格好の書と言えよう。全編は下記の 8 章から成っている。

- ① 港湾
- ② 港湾の基本的機能
- ③ 港湾労働
- ④ 1945 年以降に生じた変化
- ⑤ ユニット輸送
- ⑥ コンテナー
- ⑦ バルク貨物
- ⑧ 将來の港湾

第1章において著者は、船は本来海を走るべき使命を持って建造されたにもかかわらず、定航船について言えば、1950年のデータで、一年365日のうち235日（1937年では165日）は港に停泊しており、1960年代に至っても改善の跡がないことを指摘している。これは一見何でもないことのようであるが、実は重大なポイントであって、ほとんど全ての港湾の問題はここに発しているといっても過言ではない。従って、全編を通じて著者は視角をこの一点に据えて、いかにして船を早く洋上に去らしむるか（Quick Turnover）という議論を展開して行くことになる。

この章では次いで、港湾の管理形態についてヨーロッパの主要港（ロンドン、アントワープ、ロッテルダム、コペンハーゲン、ハンブルグ）等の実例にふれながら

- ① 国家によって直接運営されている港
- ② 地方公共自治体が管理している港
- ③ 独立した管理機構（ポートオーソリティ）が管理する港
- ④ 私企業が造成管理している港

の4つに大別し、その一長一短の検討をしている。

著者はここで港湾管理のあるべき姿はかくかくしかじかであるといった議論はせず、全ての港はそれぞれの歴史と個別の存在意義が在って、その運営形態も千差万別であるのは当然であると言っている。

第2章においては、港の基本的な活動のさまざまな面を解説している。即ち、バースとそれに附属する上屋の構造、岩壁クレーンと本船デリックの得失、縛取りの効用、輸出入雑貨の取扱いなどの点に触れた後、本船の速発を阻害するその他の要因として、

- ① 多すぎる関係書類
 - ② あいまいなマーキング
 - ③ 事前連絡の欠陥
- の三点を指適している。

特に①については別表のような面白い数字を挙げている。

海上輸送に関連する書類の多くは、エリザベス一世以来の蒼然たる英文で記されており、伝統を重んずる国の著者にしても、さすがにウンザリしているようである。

海上輸送に併うかかる非能率と悪弊は、万人の認める所でありながら、一向に改善

	ニューヨーク	横浜	ホノルル	シドニー	ロンドン	コペンハーゲン
船が貨物を積み卸す場合に必要な書類	22	32	46	23	21	21
飛行機の場合	4	羽田 3	3	2	4	0

のきざしが見えないのは利害の相反する人々同士の協調精神の欠陥、複雑にして広範囲にわたる問題の本質を理解して前進を図るべき人の不足、港湾に関連する官庁が多すぎる反面、部分的な仕事に追われ、総合的視野に立っての行政が行なわれていないことなどを挙げている。

これらの指摘は全てイギリスの現状に立脚している筈であるが、読んで行くうちに我国の実情を語っているかの如き錯覚を覚えた。。

第3章は港湾労働にふれている。港湾労働の特殊性も、我国のそれと全く同様であって、他産業の労働と較べ、波動性の多いこと、労働条件の過酷なこと、安全性に欠けることなどの不利な点を指摘した後に、かかる現状から脱却する有力な手段としては労働力のよりよき再生産たる教育訓練の徹底を図ることであるという主張をしており、ロッテルダム等の実例からしても至当な意見と思われる。ただ、ここでいさか気になるのは、荷役、運搬、保管等の労働に対する著者の見解がその他の第一次、第二次産業の労働と較べ、多少二義的に見ている点であり、広義のサービス行為が社会的分業の進展するなかにあって、いかに重要かという認識にやや欠けているように思われるのは残念である。

従って、港湾労働に対する解説も、機械化なり、労働条件が中心で、港湾労働そのものの使命なり役割等の分析がほとんど成されていないことにもなる。

第4章では、著者は1945年以降に港湾に生じた各種の変化を、機械化の進展を中心に語っている。第二次大戦によって多くの人手を失い、ほとんど全ての施設が破壊しつくされた後、イギリスの復興は船で運ばれて来たアメリカの救援物資によって漸次立ち直って行くが、その時に活躍したのが、アメリカ軍の残したモータークリーン、フォークリフトであった。そして、その後の港湾の変化の主流は機械力をいかに活用するかという事であった。ただ残念なのは著者は、機械それ自体の解説には多くのページをさきながら、機械を進展させて行った社会的背景なり、貨物流動そのものの変

化にはほとんど目を向けていない。そのために最近20年間に生じた変化の分析が、表面的な現象の追跡に追われた形となっている。

第5章のユニットロード、第6章コンテナー輸送、第7章バルクカーゴの三章では、輸送対象に応じて、その輸送方式が、いかなる変化を見せていくかについて述べられている。

著者は、機械化の進展が、貨物の輸送単位、梱包方法の改革をうながし、雑貨においては、パレットの活用、大形一托梱包の進展を産み、これがユニットロード方式の確立となったと説き、コンテナー輸送もこのユニットロード方式の一形式であるという見解をとっている。コンテナー輸送については、我国同様、受身の立場にあるイギリスであるが、著者の姿勢は積極的であって、いくつかのコンテナー輸送の利点を挙げた上で、それに対応する荷主の立場、船会社への影響、埠頭施設、荷役方法の変化等、興味ある問題に触れ、結論として、早晚、通常の雑貨の海上輸送については、この方式がますます広まることになろうと断じている。

一方、バルク貨物の輸送についても、専用船による運搬も、本質的にはユニットロード方式の究極な姿であるという見解をとっており、石油、鉱石、石炭、砂糖、穀物、サルファーなどの例をあげて、専用船、専用機械、専用港利用の大量单一貨物のバルク輸送形態の発達を述べ、しかも対象貨物が、工業原材料のものから、近時は、自動車専用船、はては、ブドウ酒（カリフォルニア、ニューヨーク）、オレンジジュース（フロリダ、ニューヨーク）等の分野にも広がりつつあることを指摘している。

著者の経験が、やや西ヨーロッパに片寄っているという難点はあるが、この三章はさすがに実務家の筆になるだけに、アンローダーのキヤバシティーや運送コストの検討なども、数字の裏付けがあって、きわめて興味深いものがある。

いずれにしても、この三つの章を読むと、海上輸送の変化は、静かなる輸送革命的な様相を帯びており、しかもそのテンポが意外に早いことに驚かされるであろう。

第8章は、将来の港湾について述べて本書の結論としているわけだが、はじめに、ロッヂデール報告の各種提言をとりあげ、その意義を強調した後に、現在、ヨーロッパを中心として、世界の主な港で進行している、開発の状況を報じている。

ここでは、アムステルダム、アントワープ、イタリア諸港、リヴァプール、ロンド

ン、ニューヨーク、ロッテルダムなどが、例示されているが、いづれも船の大型化と専用化にどう対処するかということが、中心課題となっている。ついで、コンテナー輸送が主流となった場合に、どのような姿となるかについてふれている。特に目を惹くのは、従来の埠頭、港湾倉庫、船、などの諸施設の存在意義が急速に薄れて行くことを予測している。

かくの如く、現代の港湾は、経済活動の変化に対応して日進月歩の改革を必要としており、多くの人が未だはっきりとその必要性を認めぬときには、その青写真を用意し、しかもそれを実行に移さねばならぬところに眞のむづかしさが在するということを述べている。

著者はついで史家ギボンの「帝国（東ローマ）の役人共は、自分達の手に余る問題や、前例のない提案にぶつかると、そのプライドの故に、それらの提案は野蛮であるとか、現実離れしているなどという理屈をつけて却下することを常とした。」という言を引いて、警世の辞とし、結言に代えている。

本書は以上述べた如く、海上輸送の問題を、港湾活動に焦点を合せて論議しており、しかも、それぞれの問題が具体的な事例をふんまえて語られているために、専門的な話題に終始しているにしては、理解しやすく又興味深い内容、になっている。ただ、あまりに多くの現象が羅列的に述べられているために、それらの事象の眞の原因の掘り下げなり、現象相互の有機的なつながりに対する言及が成されていないこととなり読後の印象は、やや物足りない。

しかしながら、これとても強いて欲を言えばの話であって、実務家の間からかかる内容の本が生れるという事は、海国イギリスの伝統の所産というべく、著者の努力に対しても心からの敬意を表する次第である。

Pergamon Press
1965. p. 164